



駿府と今川氏

第22回

尾張に向け駿府を出陣する今川義元

駿府を子 氏真に 任せていた義元

今川義元から氏真への家督交代については、従来は、永禄三年（一五六〇）五月十九日に義元が桶狭間で織田信長に討たれた後と考えられてきた。しかし、近年の研究によって、すでに弘治三年（一五五七）正月以前に家督が氏真に譲られていたことが明らかにされている。桶狭間の戦いの三年も前に、すでに駿府の支配権は義元から氏真に委譲されていたのである。

この事実と、桶狭間の戦いは連動しているのではないかというのが私の解釈である。以下、この点をもう少し掘り下げてみたい。

義元は、比較的支配が安定していた駿河をまだ若い氏真に任せ、自分は支配が困難な遠江・三河を担当している。氏真に領国経営の一翼を担わせ、一種の「政治見習い」をさせる腹だったのだろう。

これは戦国大名の宿命といってもよいが、大名領国は停退は滅亡を意味しており、義元としては、三河からさらに尾張に版図を拡大していかないことには、今川領国を維持できないと考え、少しずつ

尾張へ侵攻しはじめていた。「駿府は氏真に任せている」という安心感がその背景としてあったのであろう。

しかし、その安心感が結果的には命取りになってしまふのである。

駿府出陣と 桶狭間での死

永禄三年五月十日、今川軍の先鋒が駿府の今川館から出陣していった。義元本人は十二日に出陣しており、総勢二万五千と言われている。

このときの出陣のねらいについて、「上洛のため」と言われることもあるが、このときは一気に上洛を考えていたとは思えない。尾張に侵攻し、あわよくば信長を討ち取りたいというのが目標だったと思われる。

ところが五月十九日、桶狭間山で昼食休憩中、わずか二千ほどの信長軍に奇襲され、義元が首を取られてしまったのである。二万五千の大軍とはいえ、すでに二万は織田方の鳴海城・大高城を奪い、かなり前方に進んでおり、義元近くには五千ほどしかいなかったからである。

しかもこの日、義元は馬ではなく輿に乗って出陣しており、信長に総大将義元の居場所をつかまれてしまっていたのも敗因だった。

このことをもって、「義元は馬にも乗れない軟弱武将だった」などと言われるが、それは大まかちがいで、義元は、足利一門として、将軍家から特別に輿に乗ってよいという特権をもらい、それを誇示していたためである。



▲桶狭間今川義元血戦の図（小和田哲男氏蔵）

撮影：水野 茂